村落と共同店

宮　城　能　彦

宮城：　どうもこんにちは。沖縄大学の宮城です。それでは私の発表をさせていただきたいと思います。

当初ご案内では「村落内の自治機構と共同売店」というふうになっていましたけれども、もう少し広く「村落と共同店」というテーマでご報告させて下さい。

1．1980年頃の共同売店（沖縄国際大学調査報告より）

まず、約20年前の沖縄国際大学による調査が入った頃の共同売店と村落の状況とその後の変化について、簡単におさらいしておきたいとおもいます。

例えば、沖国大の報告では、1978年頃、国頭、東、大宜味、旧久志村地域で共同売店がないのは4字のみであった、とあります。現在ではだいぶ状況が変わっているということは、先程の上原先生が作成した地図（共同売店の分布図）でもおわかいただけると思います。

それから、店の収益から部落の行政費への何らかの補助金を支出していること。村落共同という積極的な機能を果たしているのは、公民館よりもむしろお金が直接に関わっている分、共同売店の方が強いんだという報告があります。

> 店の収益から部落の行政費への何らかの補助金の支出・・・・（公民館は）「村落の共同という積極的な機能を果たしているとは必ずしもいえないであろう。それに引き替え、区の財政に直接寄与している共同店の機能は、非合理的な住民感情のレベルではむしろ積極的に評価されよう」（沖国大1979年、145頁）

そして、「部落の象徴としての存在意義」というのが、沖国大の報告ではかなり強調されています。例えば、隣に共同店があるのに自分の部落にはない、そのために隣部落に買い物に行くのはけしからんから、対抗意識でもって自分の部落にも共同売店を作ろうというような事例などが紹介されています。要するに、単に経済的なものではなくて、部落（わが村）の象徴としての共同売店というものが強調されているのです。

> 部落の象徴としての存在意義（部落統合の要）・・・・「他集落だけに儲からせてはいけないという部落意識」（沖国大1979年、146頁）

さらに、「村落結合の核としての共同店」。生活問題の解決という目的実現の前提条件として村落の確立があり、そのために共同売店が共労・共益・共存の理念の下に組織され、かつ現実に機能していることが報告されています。すなわち、村落共同体における共同売店の役割というのは、ものすごく大きかった、強かったということだったと思思います。

> 村落結合の核としての共同店・・・・「生活問題の解決」という「目的実現の前提条件として、村落の確立があった。」「そこに共通している特質は、共同店が共働、共益、共存の理念の下に組織され、かつ現実に村落共同の機能を果たしているということである。(沖国大1979年、147頁)

実は、沖国大の調査当時(1978年頃)、既にかなり(後でグラフをお見せします)村落の人口はかなり減少して高齢化も進んでいるのですが、おそらく現在と比べるならば、その頃は、「村落共同体」というのがかなりまだ根強く残っている、根強かったということだったと思います。

2. この20年間における沖縄の村落共同体をとりまく状況の変化

この20年間における沖縄、特に沖縄本島北部の場合、村落はどのように変わったかということを簡単に見ておきたいと思います。

①人口の減少と超高齢化、家族世帯構成の極小化

まず、共同売店が今も残っている沖縄本島北部地域の主な村落の、(市町村単位ですけれども)人口の変化を見てみますと、ほとんどがおよそ1975年から1980年にかけて急激に人口が減少していいます。その後は横ばいあるいは微減というふうな形になっています。恩納村だけは1980年から増えていて、恩納村が増えている分、国頭郡(名護市を除く)全体の統計を取ってしまうと、横ばい状態みたいになってしまいます。(詳しいことは次のは上地さんからの報告であります)

これは(図1、図2)国勢調査人口ですが、例えば国頭村、大宜味村、東村を見てみますと、人口は減ってますけども、上の白い部分ですね、65歳以上の割合が少しずつ、じわりじわりと増えているということがわかると思います。今度は今帰仁村、本部町。今帰仁村と本部町は、現在ほとんど共同売店は残ってないのですが、同じような状況にあります。恩納村は北部地域の中ではどちらかというと特殊な例かもしれませんが、いずれにせよ高齢化率というのはじわりじわりと依然と進んでいるという

ことです。

図1 年齢階級別国勢調査人口1

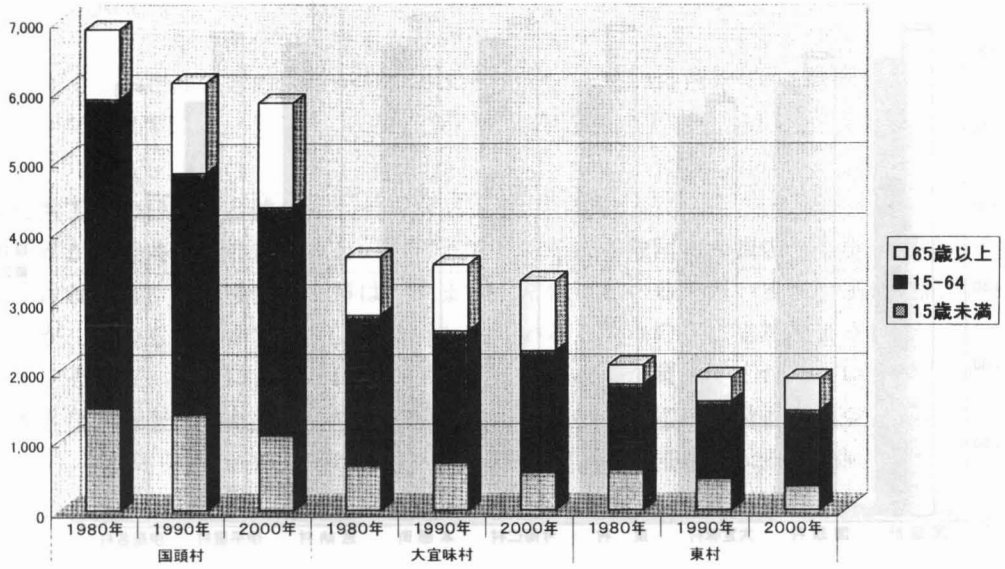

図2 年齢階級別国勢調査人口2

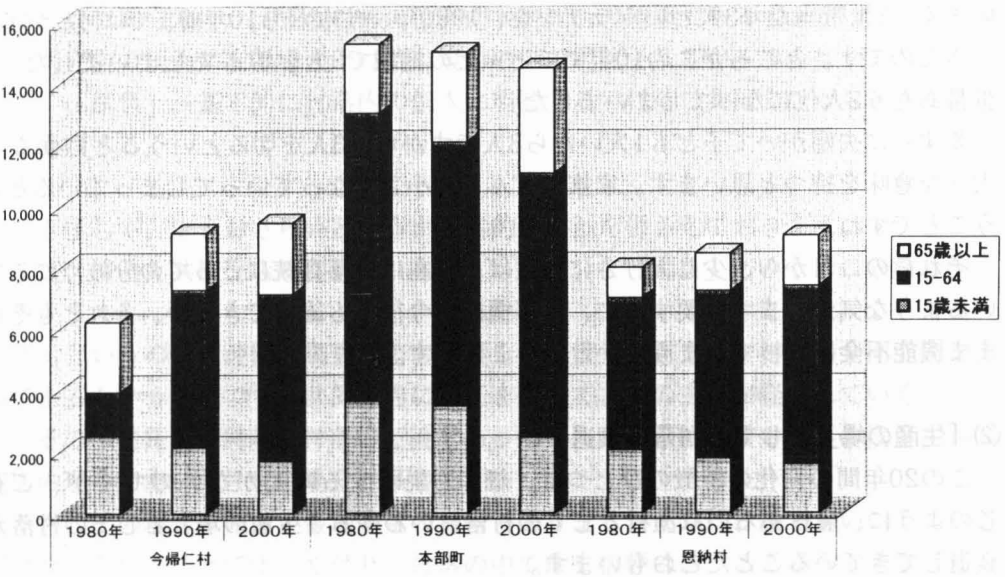

図3　一世帯あたり人員

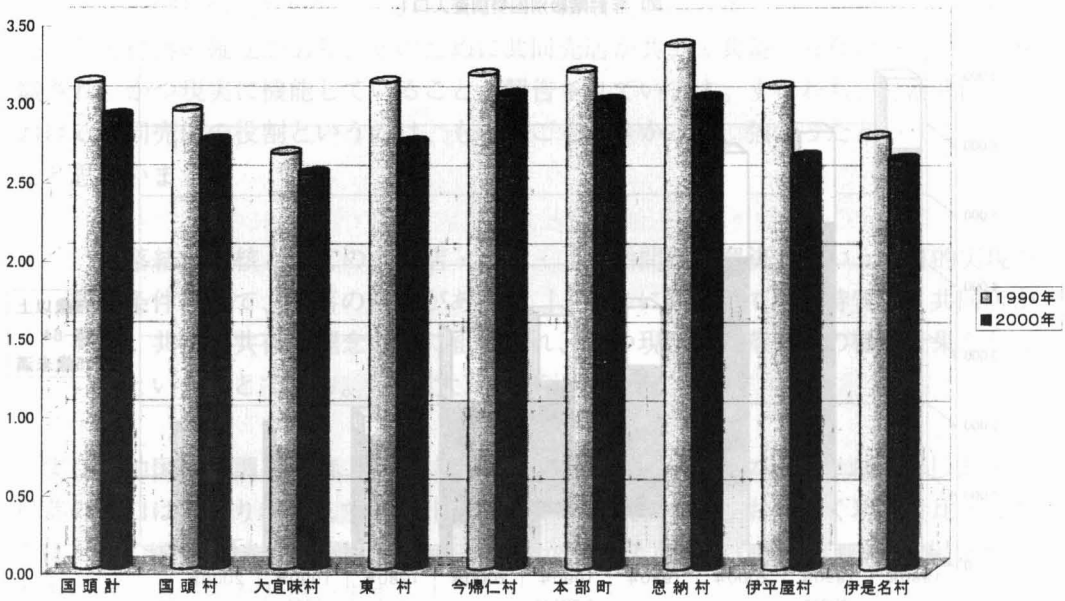

図3のグラフは1世帯あたりの家族人員数の変化を示したものですが、棒グラフの棒が縦に長いものですから、家族の人数が多いような印象を与えてしまっていす。しかし、そうではありません。

家族1世帯当たりの人員でを見てみますと、およそ3人という線が基準になると思います。1世帯当たり3人というラインを、1990年、すなわち10年前までは何とか守ってきたのです。ところがこの10年でほとんどの地域で3人を切ってしまいました。1世帯あたり2人代になってしまいました。

要するに夫婦がいて子ども1人いたら3人ですから、3人を切るということはかなり大きな意味を持つと思います。家族がどんどん小さくなっていってしまっているということですね。

それらのことから、少し大げさに言えば、現在は村落存続にとっての分岐点にきているような気がします。要するに、村落機能が今後とも維持できるか、それともそのまま機能不全になってしまうのかということです。

②「生産の場」としての村落の衰退

この20年間の変化の特徴のひとつは、細かく説明する時間がないのですが、ご存じのように、農村あるいは漁村としての村落、いわゆる「生産の場」としての村落が衰退してきていることだとおもいます。

③道路交通網の整備

それから、何度も話題にでていますが、道路交通網が整備されてきたということは大きな変化だと思います。具体的に言うと、例えば沖縄本島北部地域場合、名護の大型スーパーまで車で何分で行けるかということです。

現在では、北部のどの地域からもおよそ30分、あるいは遠くても1時間以内で行くことができます。

④公共工事の日常化と減少

それから公共工事の日常化ということです。それは沖国大の報告にも少しだけありますけれども、その後公共工事はますます日常化していると思います。主に道路関係ですが、いつもどこかで何か工事が行われているというのが、当然のようになっています。そして、地域によっては、そこで働いている人が買ってくれるというのがかなり大きな比重を占めたりしますが、これはご存じのようにごく最近は減少しているようです。

3．村落の自治組織と共同売店

①直営と請負

「直営」－村落と共同売店が一体、共同売店に主任をおき、その主任が村落の三役であったり、区長や村落の役員が共同売店の理事である場合がほとんど。共同売店の規約が有る場合と村落の規約の中で明記されている場合等がある。

「請負」－基本的に村落内の個人に委託する。村落は共同売店から家賃などを徴収する。

続きまして、少しおさらいというか基本的なことを押さえておきます。

まず、村落と共同売店の関係は、大きく「直営」と「請負」という形に分類できると思います。

直営というのは、沖国大調査報告の言葉を少し借りて言えば、村落と共同売店が一体であるということです。共同売店に主任を置いて、その主任が経営していくのですが、その「主任」が同時に村落の三役であったり、あるいは区長や村落の役員が共同売店の理事であったりする場合が多いです。

ただしその場合、先ほど金城先生の報告でありましたように、誰でもいいという訳ではないということです。やはり、村落の中で最も信頼のおけるという人が選ばれる訳です。

共同売店の規約が独立してある場合と、それから村落の規約の中に共同売店が位置付けられている場合があります。(規約がない場合もありますけれども) これらが、「直営」という形態です。

もう一つは請負という形態です。これは部落から委託を受けてやるんですけれども、この場合もやりたいと言えば誰にでもさせるわけではありません。やはり、かなり信頼のおける人にしか委託できない訳です。

我々が調査した範囲では、「請負」の場合、ほとんどが家賃を徴収しています。水道光熱費も部落に対して支払っている場合がほとんどですが、中には売り上げが芳しくないので家賃を免除してもらう例もあるようです。

4. 村落の変化それにともなう共同売店の変容

①共同売店の多様化と2極分化

A. 立地条件・経営努力等による比較的安定・積極的経営の共同売店(例えば国頭村奥・浜・安波、大宜味村喜如嘉、東村高江・慶佐次、恩納村恩納、名護市嘉陽・伊是名村勢理客、石垣市星野など)→村落(自治)への貢献(各種行事への寄付や株主への配当等の経済的貢献、村落の象徴としての機能、等)

B. 存続事態が非常に厳しい状況にある共同売店(大宜味村・石垣市の大部分、国頭村、東村、名護市の一部など)→村落による家賃その他の補助(免除)等、経営状況打開のための試行錯誤(直営から請負へ、請負から直営へなど様々)

先程の上原先生のレジュメにもありましたけども、共同売店は細かな点では、多様化しているとおもいます。先ほどお話したように、経営形態で言えば、「直営」か「請負」ということになるわけですが、どちらの場合にせよ、村落の実情にあわせて、経営方法とか、家賃の支払いとか、主任や請負人の決め方とか、村落との関係等、それぞれの地域で、様々な共同売店経営が展開されているのです。

しかし、大きく分けると二極分化しているという印象を受けます。

ここは「比較的」というのを強調しておかなくてはならないのですけれども、その一つは、比較的経営が安定している共同売店です。あるいは、むしろ積極的に経営を展開している共同売店。例えば有名な国頭村の奥とか浜とか安波とか、あるいは大宜味村の喜如嘉とか、東村の慶佐次とか、高江とかというところです。

それは、一番に立地条件によるものだと思います。すなわち、名護市街から比較的遠いか不便な位置にある。そして、村落自体のもつ経営意欲と、その努力によるもの

だとおもいます。

そういった所は、村落に対する共同売店の貢献度もかなり高い。売り上げからの世帯への配当のみならず、村落行事への寄付行為など。そして、沖国大の報告にもあったように、むしろお金を扱っているという部分で、村落の自治組織（公民館）よりもある意味深いつながりがあると言えるかもしれません。

しかし、私の方で特に問題提起したいというか関心があるのは、もう一方の極の方です。外の我々から見ると、こんな小さな村落で、あまり商品もおいていないのに、なぜ共同売店の経営が続けられるのだろうか、なぜ潰れないんだろうかという疑問をもってしまうような、零細な共同売店です。そういう共同売店の方が私にはより興味があります。

そういう所は経営状態がよくないし、村落自体の過疎化も進んでいますから、試行錯誤をしながら、共同売店の経営を続けています。先程話した、家賃の補助等もその例です。「直営」だからうまくいかないのではないかと「請負」にしてみたり、逆に「請負」だからうまくいかないから「直営」にしてみたりとか、そういったものも見られます。

5．村落の共同性と共同売店

①経営が困難であるにもかかわらず存続させている理由

次に村落の共同性と共同売店ということを考えてみましょう。まず、経営が困難であるのにも関わらず存続させている理由はどこにあるんだろうと考えました。回収した調査票でも、あるいは直接訪ねて行って聞いた話でも、必ず出てくるのは「お年寄りのため」です。

若い人や車がある家庭では、北部だったら名護、石垣だったら石垣市街に買い物に行くことができるけど、年寄りは行くことができない。共同売店がなくなってしまうとお年寄りが困ってしまうから続けている、という話をほとんどすべての共同売店で聞きました。

それから日用品ですね。我々もそうですけども、例えば週末に大型スーパーで買い物しても、必ず買い忘れる物がありますね。ちょっと醤油が切れたとかトイレットペーパーが切れたとかといった時に、那覇とか沖縄市周辺に住んでいる我々の場合だと、ちょっと近くのコンビニに行って買ってきます。大型スーパーよりは少々値段は高いけども、便利なので近くのコンビニに行くということになりますけど、それ役割を共同売店が担っているわけです。

お年寄りだけで住んでいる人の中には、お子さんとかお孫さんとかが週末にやって来て、大型スーパーなどからごっそり買い物してきて冷蔵庫の中にいっぱい入れて帰っ

て行くという方も沢山いらっしゃるようですが、それでもやはり、醤油が切れたとか、お豆腐が食べたいというときに、近くの共同売店がなくては困るのです。あと面白いのは線香を切らした時にすぐ買えないと困るとかですね、ウチャトー（仏壇のお供え物）のお茶がないと困るとか、そういったのがありました。

いずれにせよ、共同売店を経営している人も区長さんも、それから買いに来た人も、口を揃えたように「お年寄りのため」にやっている（ある）のだと言う。それが、細々と経営している共同売店の最大の共通点です。

ということは要するに、村落を維持していくために、特に高齢化が進んだ村落を維持していくためには共同売店というものが非常に重要であるんだという共通認識がある訳です。

②請負または主任のなり手がいないという現実

ところが実際には採算が合わないとか、共同売店でやるよりもどこかにちょっとパートとか出た方が収入が多いとかという現実があるわけです。

あるいは収入はそこそこあっても、やはり村のみんなの共同売店ですから、例えば営業時間でなくても開けてくれと言われたり、行事とか法事とかで臨時休業したいけれどもできないとか、かといって人を雇えるわけでもない、そういった時間的・精神的な拘束があります。だから責任が非常に重いということでやり手がなかなかいないわけです。

ただし、沖国大の報告でもすでに共同売店の「担い手」の問題は報告されています。しかし、現在は、担い手「不足」とうよりも、担い手が「いない」と言う方がいいのかもしれません。

規約ではほとんどの場合には選挙による選出です。ただしこれは前提としてなり手が複数いるというのが前提になりますけども、実際は誰もやりたがらないというかできるならばやりたくないと言う人が多い訳です。だから区長さんなり村の人達が「もうあなたしかいないから何とかやってくれないか」というような形で、根回しになる場合が多いようです。

あるいは、これもよく聞いた話です。「自分は本当は去年で任期を終えているのだけれど、次の人がいないからまだ辞められない」。

③共同売店経営者の苦悩

このような話を聞くと、共同売店を主任なり請負なりでやっている人の苦悩というのが見えてきます。現在主任や請負を引き受けている方の話を聞いていていると、非常に責任ある人だなとか、非常に献身的な人だなというような印象を受けます。本当に頭が下がるような方が多いのです。

だからこういう話もよく聞きます。みんなのお金だから1円でも間違うと申し訳な

いというような話。あるいは年寄りが頼りにしてくれるから本当は辞めたいんだけど辞めきれないという話。要するに責任感がとても強い。

しかし、そういう責任感を抱えつつも、矛盾も感じているようです。「みんなが大切、大切という割りには買いに来ないよ」、というな話もよく聞きました。

面白い例としては、ある地域では、年寄4人位で車をチャーターして名護に週に1回買い物に行くということがありました。「だから、車がないから全部買ってくれるわけではないんだよ、チャーターしてまでも買いに行くのに、だったらもうちょっとうちで買ってくれてもいいのに」という話もあります。

ただ、こういう報告を聞くと、どうしても共同売店の人にシンパシーを感じると思います。私も、共同売店の人から話を聞いている時は、一緒になって「けしからん」と思います。ところが少し考えればわかると思うのですが、先程フロアの方からもありましたけども、やっぱり共同売店は値段が高いし、品数も少ない訳ですから、村の人からすれば逆も言えてしまうわけですね。みんなのために共同売店を存続して欲しいから、できるだけここで買いたいんだけども、「欲しい物がない」。やっぱり名護とか石垣とか行った時についでに買った方が「安い」。我々が100円ショップで買う心理みたいなものがあると思います。だから安易に、「村の人がもっと共同売店を利用しないといけない」、と怒ったところで何の解決にもならないと思います。

④「共同性」が足かせになってしまうという皮肉

（これは言い過ぎかもしれないなと思っていますが、）むしろ「村の共同性が足かせになってしまう」という皮肉な現実もあるわけです。

例えば、積極的に経営したい、アイデアも自分はたくさんあるのだけれども、経営に関しては、一々村の了解を得ないといけない。だから自主的な経営ができないジレンマを抱えているのだという話を幾つか、そんなに多くはないけれども聞きました。例えば、開店や閉店の時間すら自由にできない。仕入れする商品も自由が利かない。「請負」だが、部落から家賃を補助してもらっているので自分勝手にできない等。

自由に経営できないので共同売店の主任を辞めて、個人で店を出した例もあります。共同売店を維持していくためには、積極的な経営をやろうとしても、あるいは消極的な経営であっても、どうしても個人に献身的な努力を求めざるを得ないという現実が村落にはあるように思えます。

⑤経営者の自負とやりがい

ただしそういうふうに報告しますと、非常に悲観的聞こえてしまって困るのです。というのは、一方で面白いなと思うのは、色々不満などを話したあと、多くの共同売店経営者が「でもね」と言うのです。でもいろいろ大変だけども、みんなのために自分は頑張っているんだよという、そういうやりがいみたいなものは感じられますよと

いう話はよく聞くことができます。

それから、こういう話もいくつか聞きました。共同売店で店番している人、この人も高齢者なのですが、「自分がここに座っているだけで、みんなが買い物ついでにユンタク（おしゃべり）してくれる。自分ははユンタクが生きがいみたいなものだから、得しているんじゃないかな」と言うのです。そういうことは次の上地先生の報告にも出てくると思いますけども、共同売店のある種の可能性みたいなものがそこに潜んでいるんじゃないかというふうに思います。

6．村落の鏡としての共同売店

①共同売店から見えてくるもの

最後に、共同売店をどう考えるかというと、それは、村落の一つの鏡であるとおもいます。

一つは、今報告しましたように社会状況の反映としての共同売店。それからライフスタイル、消費行動、その他生活様式の変容の鏡としての共同売店。そして、個人と村落の関係の鏡としての共同売店。非常に有能で非常に責任感あふれる個人が、どうしても献身的な努力をせざるを得ないという現実を映し出す共同売店。

村落の人間関係が、例えば共同売店に1時間でも2時間でもいるだけで、何となく見えてくるというような気がします。

②共同売店の意味と可能性

それでは、「むしろ存続している方が不思議」という零細共同売店の状況を我々はどう考えたらいいのでしょうか。おそらく、そこには市場原理とは別の何かが働いているのではないかと思います。

農村というと、（私も農村社会学出身ですけども）どうしても生産力とかそういったもので農村を見てしまいます。しかし、今回、共同売店を調査することによって、目からウロコが落ちるような気がしました。

それは、やはり農村は「生産」だけをしているのではなく、「消費」の場でもあるということが、共同売店を通すとよく見えてきます。

農村を「消費」という場から見るとまた別のものが見えてくるのでないか。あるいは「生活の場」としての村落という姿が、共同売店を通して見えてくるのではないか。熊本大学の徳野先生が、こういう事おっしゃっています。年寄りが自分の村で人生を全うできることが農村が存続する第一条件であると。私は、それにとても共感しました。お年寄りが安心して友達とお喋りしながら仲良く暮らしていける環境を考えるとき、共同売店というのは非常に大きな意味というか可能性を持っていのではないかと

思いました。
　私の報告は以上です。ありがとうございました。

司会　どうもありがとうございました。非常に的確なご報告をしていただきまして、だいぶ共同売店あるいは共同売店が現代社会に置かれている状況というのがクリアに見えてきたのではないかなと思います。またレジュメの方にも参考文献とかきちんと示していただいてありがとうございます。今の報告いろんな問題提起がなされてたと思いますが、フロアからのご質問もしくは後半部分に続ける意味での問題提起をしていただきたいと思います。
　はい、じゃお願いします。マイクを…

渡久地　公務員をやってます渡久地と申します。よろしくお願いします。個別的な話になりますけれども、石垣の伊野田の方の売店に以前行ったことがありまして、実は伊野田という部落には共同売店の他に個人経営の商店が2ヶ所ある。つまり3ヶ所の売店があります。というようなことで、今お話の中には共同売店の公共性だとかという意義がいろいろ出てきたわけですけれども、村落において個人の市場原理と言いますか、商売をやるというところで少なからず共同売店よりも規模的店舗の大きさだとか対して変わらなかったんですが、商品の数だとか自分が自助努力されている個人の方が営業としてやっているというところでずいぶん違いがあったのかなという部分があって、売店の利用者も減ってきた。で集落の中での公共性だとかというのが、要は村自体が一枚岩じゃないというところからも、店が閉鎖に追い込まれるという場面が伊野田の場合はあったという気がします。ですから、これというならば今の話だと、役割というか機能という部分と村の中での認識だとか約束事を守っているかとかいう、ちょっとしたことなのかも知れませんけども、微妙に影響し合ってるところかなという気がします。そこら辺の見方あるいは閉鎖に追い込まれる場面というのはいろいろあると思いますが、そこら辺を個別的に見ていかれたのかどうかという疑問をちょっと伺いたいなと思います。

司会　お願いします。

宮城　今、伊野田の例を出してもらったんですけども、伊野田の場合は共同売店が3ありましたが、今は1つしか開店してません。一方で個人商店があります。その個人商店やっている方は、かつて共同売店をやってた方で、今ご報告申し上げた典型的な例です。共同売店でいろんな工夫をしてやっていこうと思ったけども、非常に足かせが多くてそれなら辞めちゃえと。辞めて個人で商店やった方がいいんじゃないかというふうな事例になると思います。今おっしゃいました、村が一枚岩でないということ

については、だからこそ共同売店を見ることによって、単純に市場原理ではないもの、村の人間関係その他のことが絡まり合っている現実を理解していくことができるのではないかと考えております。

伊野田の場合にはまだいいのですけども、他はですね、例えば○○村の○○共同売店にはこんないざこざがあって、だからどうだという話は、この場ではかなり申し上げにくいんできついんですが、ただやっぱり個別的な調査を続けてできるだけ聞き取りして事例は一つ一つ積み上げていきたいと思っています。現在のところ、中間報告という形で聞いていただければいいと思っております。以上です。

司会　他の方はいかがでしょうか。どうぞお願いします。真ん中の後ろですね。

山里　……さっきもちょっと出ましたが機能という点ですね、私は重視すべきじゃないかなという気がします。というのは例えば呉我山の共同売店、別に優秀ともなんとも書いてませんが、安定的経営とも書いてませんが、朝の7時から開店しまして晩の8時まで開くんですよ。奥はそうでないんですよ。その他70戸の戸数ですけれども、伊豆味とか奥とかに比べますとずっと小さいんですよ。面積も売り場面積としては小さい、商品の数も少ないかも知れませんが、従業員は常時2人いるんですよ。店員は、売り子が。そういう機能面ですね、その他新聞は朝売店に行かないと、売店に行って受け取るとか。ですからみんな部落の人はそこに集まる。

その他自治会が小さい部落ですので、奥は違うかも知れませんが、大宜味あたりは同様だと思います。書記や区長が区事務所にいるのは午前中だけなんですよね。場合によっては月・水・金とかになったりしますが、呉我山も午前中だけですよ、書記や区長が区の事務所にいるのは。しかし共同売店は7時から8時まで常時2人いるんですよね。相談事みんなそこに行くんですよね、連絡事項も。誰々さんが来たら一つこういう伝言してくれと、誰々さんにこの資料を渡してくれ。そして訪ねる人が来たら、案内してくれ、教えてくれねとか。非常に部落の何と言いますか、集合場所でもあるし、また案内先でもある。そういう多面的な機能もありますが、そういう機能も見ながら共同売店を評価していただきたいなという気がしますが、その点どうでしょう。

司会　はい、お願いします。

宮城　その点につきましては、報告の中でも申し上げましたけれども、共同売店の主任さんとか売り子さんには本当に頭が下がる思いがすることが多いのです。私の話は、このことを大前提にしておりました。沖国大の報告にもありましたように、共同売店がうまく機能している所においてはむしろ公民館よりも重要な役割を果たしているということは基本的な認識として、その部分は置いといて次の話をしました。だから、

少しはしょってしまったみたいになって、どうも申し訳ありませんでした。

我々が調査する時も公民館の調査と並行してやったんですけれども、公民館に行っても誰にも会えないことが多いのです。自宅に行っても畑行ってるとか仕事行っているとか。ところが共同売店はよっぽどのことがない限り年中無休の所が多いですし、今、朝7時から夜8時までとおっしゃいましたけども、結構多いんです、朝7時からだいたい夜7時という所が、まだ集計はしてないのですが、私の印象としては多くありました。ほとんどが12時間営業ですよね。これはすごいこと、大変なことだと思います。

ただ、呉我山の共同売店については調査不足でして、今、貴重な情報いただいので、実は、報告を放っぽり出して直接お話お伺いしたい心境なんです（笑）。本当に共同売店の方がご苦労なさっていろんな村の機能を果たしているというのは、重々理解しているつもりです。どうもありがとうございました。

司会　他にいらっしゃいますでしょうか。どうもありがとうございました。今のご質問とかご意見も次の上地先生のご報告ともつながることだと思いますので、さらに上地さんの報告を聞いた後、第2部の議論を掘り下げていきたいと思います。

ただ今の宮城さんのご報告を聞いていて私も村落社会学で強く思いましたのは、共同売店を通してとくに沖縄の状況ですけど、現代社会の何が見えてくるのか。共同研究する場合に、各ディスプリングごとに当然それが出てくるだろうと思います。そのことが大変重要ではないかというふうに考えています。どうもありがとうございました。

宮城　どうもありがとうございました。

参考文献

徳野貞雄，2001，「農村社会の持続と定年農業」『農業と経済』67巻12号.

来間泰男・波平勇夫・安仁屋政昭・仲地哲夫，1979，「共同店と村落共同体－沖縄本島北部農村地域の事例（1）」『南島文化創刊号』沖縄国際大学南島文化研究所.

安仁屋政昭・玉城隆雄・堂前亮平，1983，「共同店と村落共同体」『南島文化第』5号，沖縄国際大学南島文化研究所.

玉野井芳郎・金城一雄，1978，「共同体の経済組織に関する一考察－沖縄県国頭村奥区の「共同店」を事例として－」『商経論集』第7巻第1号，沖縄国際大学商経学部.

川本彰，1976，「"むら"づくりの伝統の上に茶の主産地を確立 沖縄県国頭郡奥区」『新しい農村'76』朝日新聞社編.